

第33課 準備のための聖書日課

11月7日(月) ネヘミヤ3:33-38 城壁再建の困難の一場面

33 サンバラトは、わたしたちが城壁を建てていると聞いて怒り、激しく憤慨した。ユダの人々を嘲笑い、34 彼は仲間とサマリアの兵士を前にして言った。「この哀れなユダの者どもに、何ができるか。修復していけにえをささげるつもりなのか。一日で仕上げようとでもいうのか。灰の山から焼け石を拾い出して、生かして使おうとでもいうのか。」35 アンモン人のトビヤはそばから言った。「できたとしても、そんな石垣など、狐が登るだけで崩れてしまうだろう。」

36 わたしたちの神よ、お聞きください。このように辱めを受けているのです。彼らの投げつける侮辱が彼ら自身の頭上に降りかかり、捕らわれの身となって異国で辱めを受けるようにしてください。37 その悪を赦さず、その罪を御前から消し去らないでください。彼らは再建に励む者を嘲っています。

38 わたしたちは城壁の再建を始め、その全長にわたって高さの半分まで築いた。民には働く意欲があった。

バビロン捕囚の間、捕囚されずにエルサレムに残り、住んでいた人たちの中には城壁再建を快く思わない人もおり、挑発をしますが、挑発に耐えて祈ります。祈りの後半はちょっと表現が露骨ですけど、そう祈ってしまうほどの耐えがたい言葉だったのだと読み取れます。また、そのようなことがあっても働く意欲が失われないほどに、神さまから多くの恵みを受けながらの作業であったかと思えます。

11月8日(火) ネヘミヤ6:15-7:3 城壁の完成とその後の困難

15 城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した。16 わたしたちのすべての敵がそれを聞くに及んで、わたしたちの周囲にいる諸国の民も皆、恐れを抱き、自らの目に大いに面目を失った。わたしたちの神の助けによってこの工事がなされたのだということを悟ったからである。

17 そのころ、ユダの貴族は頻りにトビヤに手紙を送り、トビヤの手紙も彼らに届いていた。18 ユダの多くの人々は彼と互いに誓約を交わす関係にあったからで、トビヤはアラの子シェカンヤの娘婿であり、トビヤの子ヨハナンはベレクヤの子メシュラムの娘をめぐっていた。19 彼らはわたしの前ではトビヤへの賛辞を述べ、トビヤにはわたしの言葉を密告した。トビヤはわたしに脅迫の手紙をよこした。

1 城壁が築かれたので、わたしは扉を取り付けさせた。そして、門衛と詠唱者とレビ人を任務に就けた。2 わたしは、兄弟のハナニと要塞の長ハナンヤにエルサレムの行政を託した。このハナンヤは誠実で、だれよりも神を畏れる人物だった。3 わたしは彼らに言った。「日射しの暑くなる時まで、エルサレムの門を開いてはならない。また彼らが任務に就いている間に扉を固く閉ざしなさい。エルサレムの住民に守備態勢を取らせ、各自が自分の持ち場と、各自が自分の家の前を守るようにせよ。」

昨日のサンバラトや今日のトビヤは地主階級に属するユダヤ人であったといわれています。彼らとユダの貴族は金儲けを通して繋がっていたようです。悪意のある権力者達とのやりとりは判断が難しいですが、ネヘミヤはそんな脅迫にのらず、祈り委ねて、主が示された通りに進めています。主のご計画が一番であること、主の守りが与えられていることを理解していたからです。

11月 9日 (水) 詩編19：8－11 喜びの律法

8 主の律法は完全で、魂を生き返らせ
主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。
9 主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え
主の戒めは清らかで、目に光を与える。
10 主への畏れは清く、いつまでも続き
主の裁きはまことで、ことごとく正しい。
11 金にまさり、多くの純金にまさって望ましく
蜜よりも、蜂の巣の滴りよりも甘い。

分かるようで理解しづらい箇所かと思います。

主の律法、定め、命令、戒め、これらは全て主の御言葉です。逆説的に見ると主の御言葉以外に、魂の再生、真の知恵、心の喜び、目に光を与えるものは無いといえます。主の御言葉を中心に据えて生活していくことが喜びに繋がっていくのではないのでしょうか。

11月10日 (木) 詩編119：169－176 律法と賛美

169 主よ、わたしの叫びが御前に届きますように。
御言葉があるがままに理解させてください。
170 わたしの嘆願が御前に達しますように。
仰せのとおりになんてわたしを助け出してください。
171 わたしの唇から賛美が溢れるでしょう
あなたが掟を教えてくださいますから。
172 わたしの舌はあなたの仰せを歌うでしょう
あなたの戒めはことごとく正しいのですから。
173 あなたの御手はわたしの助けとなるでしょう
あなたの命令を選び取ったのですから。
174 主よ、御救いをわたしは望みます。
あなたの律法はわたしの楽しみです。
175 わたしの魂が命を得てあなたを賛美しますように。
あなたの裁きがわたしを助けますように。
176 わたしが小羊のように失われ、迷うとき
どうかあなたの僕を探してください。
あなたの戒めをわたしは決して忘れません。

詩篇 119 編は聖書の中で一番長い章であり、ヘブル語のアルファベット順に 22 に分かれて書かれているそうです。ここはその最後の箇所になります。「～ますように」「～してください」が続き、祈りのようです。アーメン、その通りです。

11月11日(金) 申命記26:5-11 共に喜び祝う

5あなたはあなたの神、主の前で次のように告白しなさい。

「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。しかしそこで、強くて数の多い、大いなる国民になりました。6エジプト人はこのわたしたちを虐げ、苦しめ、重労働を課しました。7わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げを御覧になり、8力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととするしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、9この所に導き入れて乳と蜜の流れるこの土地を与えられました。10わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」あなたはそれから、あなたの神、主の前にそれを供え、あなたの神、主の前にひれ伏し、11あなたの神、主があなたとあなたの家族に与えられたすべての賜物を、レビ人およびあなたの中に住んでいる寄留者と共に喜び祝いなさい。

エマオへの道、エマオ途上という題の絵画が多くあります。私の好きな箇所のひとつです。イエス様を失った悲しみの心が会話をしているうちに燃えていた。その会話内容が聖書に載っていたらと願う者の一人です(笑顔)。歩きながらイエス様と問答された恵みのひとは只々羨ましいです。本当にこの復活が無ければ、希望が無くなり悲しいままで終わっていました。この復活があり、今も生きておられるイエス様を感じる事が出来るのが恵みであり、喜びですね。

11月12日(土) ルカ24:28-35 心燃やす聖書

28一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。29二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。30一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。31すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。32二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、34本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。35二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

5章から始まるモーセの奨励(十戒から始まる)の最後の章です。「共に喜び祝いなさい」、主を信じて、従い歩む者たちと共に与えられた恵みを喜び祝うこと。喜びを共に祝うことも主からの御言葉です。

このコロナ禍が明けたら、信仰を守り続けた兄弟姉妹と共に喜び祝いしたいですね。

11月13日(日) ネヘミヤ7:72-8:12 主を喜び祝う日

72祭司、レビ人、門衛、詠唱者、民の一部、神殿の使用人、すなわちイスラエル人は皆それぞれ自分たちの町に住んだ。第七の月になり、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、1民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。2祭司エズラは律法を会衆の前に持って来

た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。3 彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。

4 書記官エズラは、このために用意された木の壇の上に立ち、その右にマティトヤ、シェマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが、左にペダヤ、ミシャエル、マルキヤ、ハシュム、ハシュバダナ、ゼカルヤ、メシュラムが立った。5 エズラは人々より高い所にいたので、皆が見守る中でその書を開いた。彼が書を開くと民は皆、立ち上がった。6 エズラが大いなる神、主をたたえと民は皆、両手を挙げて、「アーメン、アーメン」と唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて、主を礼拝した。

7 次いで、イエシュア、バニ、シェレブヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、ヨザバド、ハナン、ペラヤというレビ人がその律法を民に説明したが、その間民は立っていた。8 彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。9 総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。10 彼らは更に言った。「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」11 レビ人も民全員を静かにさせた。「静かにしなさい。今日は聖なる日だ。悲しんではならない。」

12 民は皆、帰って、食べたり飲んだりし、備えのない者と分かち合い、大いに喜び祝った。教えられたことを理解したからである。

8章1節の「1人の人のようになった」、この表現で神さまに愛される民であることが分かります。70年のバビロン捕囚後の出来事ですので、ここに集まっている人々の殆どが捕囚中に生まれた次の世代です。その世代にもしっかり信仰が引き継がれていることが分かります。「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」(8:10)、先ず私たちが神さまから日々与えられている恵みに喜び祝いあうことが大切なのだと。それから、その喜びを知らない方々、恵みに与かれていない方々に伝えていくのが本来なのだと、改めて思われますね。

(担当 : Y.K.)